すみだ地域学情報 We!

第59号
2022年
（令和４年）
３月発行

発行：墨田区（地域活動推進課）
〒130-8640　墨田区吾妻橋一丁目23番20号
☎03-5608-6202　FAX 03-5608-6934　✉KATSUDOSUISHIN@city.sumida.lg.jp

ひと、つながる。
墨田区

名所絵が語るすみだの歴史 ～向島編～

■古代の東海道

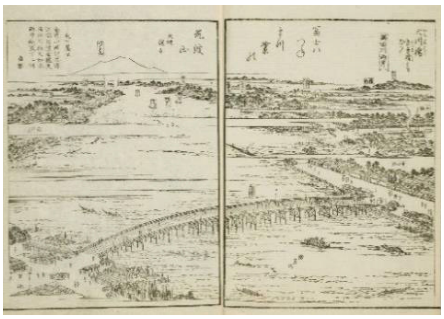
向島は古代の頃から村が生まれた地域です。飛鳥時代の６２８年に創建されたという浅草寺と浅草周辺、その対岸の向島には古代からの歴史が息づいています。

『江戸名所図会　大川橋』（天保７年（１８３６））は大川橋（現吾妻橋）の下流側から隅田川上流を俯瞰しています。画面右手が向島、「梅若」（木母寺）・「長命寺」・「牛ノ御前」（牛島神社）・「三囲」・「あきは」（秋葉神社）など江戸時代より古い寺社が連なっています。

なぜ向島は古代の頃から開けたのでしょうか。二千年ほど前、東京東部の地域が陸地化し、現在のような地形が造られました（東京低地といいます）。奈良・平安時代になると都の朝廷は全国へ向けて街道を設定し、東海道が生まれます。江戸以後の東海道とはコースがやや異なり、武蔵国から下総の国府台（市川市）へと向かう道筋でした。

今の白鬚橋付近にあった「隅田の渡し」を渡り、北上すると木母寺があります。そこから東へ向かうのが古代東海道です。今も東武スカイツリーライン鐘ヶ淵駅の南にその道筋が残っています。

流域に多くの村が開かれ、すぐ下流に海をひかえた隅田川と、古代の幹線道路・東海道が交差する向島は地域の中心的存在になりました。



「江戸名所図会　大川橋」
長谷川　雪旦　画

■伝説の地

古代から開かれた地域には伝説が生まれました。鐘が淵伝説は、隅田川の川底に沈む梵鐘が、天候の変化などで、川の流れが変わりやすいことから航行する船に警鐘を鳴らしてくれるというお話です。

『名所江戸百景　綾瀬川　鐘が渕』（歌川広重）では小さな筏を搬送する筏師が描かれていますが、綾瀬川と隅田川が合流する場所の危うさがうかがえます。

木母寺（江戸初期までは梅若寺）ゆかりの梅若伝説は、都の吉田少将の子、梅若丸が人さらいによって東へと連れ去られ、隅田川のほとりで命を落とすという、謡曲「隅田川」で知られた物語です。こうした伝説は、人里離れた場所ではなく、村や町場があり人の往来も頻繁だった都市化された場所だったからこその物語だと感じられ、都にも知られた場所だったことがうかがえます。

こうした伝説が現代にまで語り継がれることになったのは、大都市江戸の歴史が関係しています。江戸は徳川家康により開かれた新たな城下町。その規模は時代を追って周囲に拡大していきました。

江戸の庶民には次第に親代々の「江戸っ子」が増えていきます。その人たちが自分たちの足元を知りたくなるのは今も変わらないことでしょう。「徳川家康が開いた町」というだけでは飽き足らなくなり、こうした伝説や伝承が注目され、その物語を共有していったのではないでしょうか。

「名所江戸百景 綾瀬川 鐘が淵」
歌川　広重　画

■江戸の行楽地

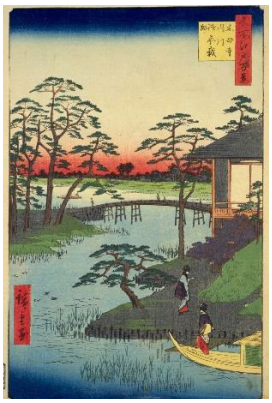
これまでも紹介してきましたが、向島には江戸より古い創建年代を誇る寺社がたくさんあり、境内の堂宇と樹木・草花、梅屋敷から始まった百花園、それに隅田川堤の桜並木があいまって江戸の行楽地となりました。しかも向島の対岸には古代からの「聖地」浅草寺があります。浅草と向島の往復には、西岸の山谷堀河口から対岸の三囲稲荷土手下を結ぶ竹屋の渡しがおおいに利用されました。まさに江戸随一の信仰と行楽の地となりました。

『名所江戸百景　木母寺内川御前栽畑』（歌川広重）では、隅田川から木母寺境内への入り堀に船が着き、芸者衆が料理屋へ向かうシーンが描かれています。

■自分を見つめる

向島の数々の寺社を巡り、草木に触れ、隅田川の流れを眺めることが江戸の人びとにとって、自分や先祖が暮らしてきた町・江戸をあらためて見つめ直す場となっていたのではないでしょうか。

（江戸・東京郷土史研究者　久染　健夫）



「名所江戸百景 木母寺内川御前栽畑」
歌川　広重　画

すみだの伝統工芸

― つまみ簪（かんざし） ―

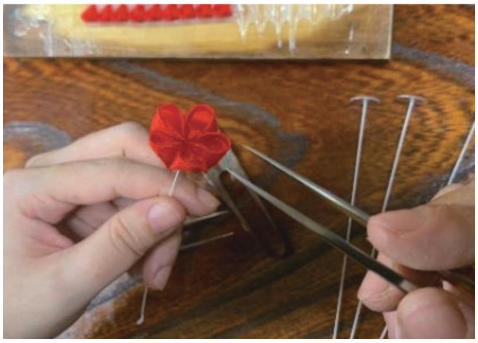
■つまみ細工とは　どのようなものか

つまみ細工とは、正方形の布をピンセットで折り、その片（ピース）を組み合わせて花や動物を表現する技術です。

つまみ簪の製造工程として、まずは細工に使用する絹の羽二重を染色します。七五三用などの明るい色は、熱した染液の中に浸して染める浸し染めを行います。同じ色を均等に、全体を染める染色技法です。色によっては、草木染めも行います。

次に丸包丁を使って裁断し、正方形にします（写真右上）。この正方形にした布をピンセットで折ってさまざまな形の片を作ることを『摘み』といい（写真左上）、これがつまみ細工の語源となっています。

そして摘んだ片を木の板に厚く塗った糊につけおき、形作った状態を保ちます。それを、抜き型と木槌を用いて作った『型』に並べてモチーフを形作ります。これを『葺（ふ）き』といいます（写真下）。



左上：「摘み」の作業　右上：裁断後の羽二重
下：「葺き」の作業

葺いて乾かしたモチーフを絹の平糸で組み合わせてまとめていき、簪の金具をつけ製品として仕上げる作業を『組み上げ』といい、これで完成となります。

■つまみ細工の誕生と発展

この技術は元々を辿ると京の公家文化の中で宮廷に仕える女官達が、余った端切れなどを使って花などを作り始めた事に端を発するとされています。

公家文化の中で生まれたつまみ細工は、江戸時代の中期頃までに京から江戸に伝わり、「花簪師」「つまみ師」と呼称される専門の職人によって、つまみ簪が製造されるようになりました。そして、江戸時代中期以降、町娘達や花街の半玉達の頭飾として若い女性の中で流行しました。江戸の流行りものとなったつまみ簪は、参勤交代や商用で江戸を訪れた人々の「江戸土産」として全国に広まりました。

■つまみ細工の現在

近年、つまみ細工がハンドメイド作品として一般の方の中で急激に流行り出しました。インターネットで誰もが気軽に作品を販売できるツールができたこと、またそれは、「好きなことで食べていく」という様な新しい概念が浸透していった時流とちょうど重なります。つまみ細工職人（職人の下で修業を積み、伝統的な技術で製造を行う者）は高齢化で年々減少し、現在では全国でも10人以下となってしまいましたが、それとは対照的に、つまみ細工で商売をする作家は次々と生まれており、１０００人を有に超えている現状があります。

私は現在製造と平行して弟子の育成をするとともに、全国の技術を学びたい方へインターネットを用いた指導をしていますが、生徒達の多くは作家活動をしています。つまみ細工の業界も時代の流れを受けて刻々と変化をとげており、自分自身もその変化を恐れず新しい事柄にも積極的にチャレンジしています。

■墨田区伝統工芸保存会の職人として

そんな中でも、先人から受け継いできた自分の職人としての考え方が、新しい時代のなんでもありなインスタントな価値観にうまく馴染めずに孤独を感じる時もあります。しかし、ここ墨田区には今でも昔気質の職人がたくさんいて仕事をしています。私が現在所属している墨田区伝統工芸保存会は、そういう昔気質な職人達の集まりです。先輩方と話をしたり共にイベントに取り組ませていただいたりする中で、日々職人としての仕事への取り組み方や生き方を再認識でき、それに勇気づけられています。また、墨田区は街全体でものづくりを支える環境づくりに熱心に取り組んでいて、下町文化の色濃く残る地域の方々もがんばれよ！といつも応援してくれます。

私はこの街が好きです。ここで暮らし、日々鍛錬を怠らず、これからも職人として成長し続けていきたいと思います。

（墨田区伝統工芸保存会
花簪師　宮　あき子）